

研究拠点形成事業
平成 25 年度 実施報告書
B.アジア・アフリカ学術基盤形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	人間文化研究機構 国立民族学博物館
(タイ) 拠点機関：	ガンチャナピセーク国立博物館
(ミャンマー) 拠点機関：	ミャンマー文化省国立博物館
(モンゴル) 拠点機関：	モンゴル科学技術大学

2. 研究交流課題名

(和文)： アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流
(交流分野：博物館学)

(英文)： New Horizons in Asian Museums and Museology
(交流分野：Museology)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.r.minpaku.ac.jp/sonoda/>

3. 採用期間

平成 24 年 4 月 1 日 ~ 平成 27 年 3 月 31 日

(2 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：人間文化研究機構 国立民族学博物館

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：国立民族学博物館・館長・須藤健一

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：国立民族学博物館・教授・園田直子

協力機関：

事務組織：国立民族学博物館 管理部 研究協力課 国際協力係、財務課 経理・調達係

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：タイ

拠点機関：(英文) Kanchanaphisek National Museum

(和文) ガンチャナピセーク国立博物館

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：

(英文) Kanchanaphisek National Museum・Director・INCHERDCHAI Jarunee

協力機関：(英文) Chiang Mai National Museum

(和文) チェンマイ国立博物館
(英文) The Office of the National Museums, Fine Arts Department
(和文) 文化省芸術局博物館課
(英文) Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre
(和文) シリントーン人類学センター

(2) 国名：ミャンマー

拠点機関：(英文) Myanmar National Museum, Ministry of Culture
(和文) ミャンマー文化省国立博物館
コーディネーター (所属部局・職・氏名)：
(英文) Myanmar National Museum, Ministry of Culture・
Expertise・NU Mra Zan
協力機関：(英文) Nay Pyidaw National Museum, Ministry of Culture
(和文) ネーピードー文化省国立博物館

3) 国名：モンゴル

拠点機関：(英文) Mongolian National University of Science and Technology
(和文) モンゴル科学技術大学
コーディネーター (所属部局・職・氏名)：
(英文) School of Humanity・Professor・Altangerel ENKHBAATAR
協力機関：(英文) Center for Cultural Heritage of Mongolia
(和文) 文化財保存センター

5. 全期間を通じた研究交流目標

博物館は、単に資料を収集・保存・展示するだけの場ではなく、特に途上国においては国家・民族としてのアイデンティティを確立する場であり、また観光振興の要として、教育施設として、あるいは戦乱・災害からの復興の拠点としての役割を持つ。そのため、アジア・アフリカにおける自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成は、緊急の課題となっている。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立民族学博物館は1994年度より、途上国を対象に、博物館学ならびに博物館の実践的技術を学ぶ研修を実施してきた。研修に参加したアジアの国ぐにのうち、タイ、ミャンマー、モンゴルでは、日本で研修を受けた人びとの間で国内ネットワークが構築されており、自国の文化的・社会的背景に即した博物館学・博物館研究を模索しているところである。

本事業では、国立民族学博物館が今までに培ったネットワークの新たな展開として、若手の人材育成を視野に入れながら、博物館学を中心とした実践的な学術基盤の形成をはかる。タイ、ミャンマー、モンゴルで博物館学の教育研究を行い、博物館活動や人材育成の

中核をになう専門家とともに、日本をふくむ4カ国での博物館学の研究成果や博物館活動の事例を共有し、共通の基盤をつくる。そのうえで、従来の受動的立場（「展示される」側）から主体的立場（「展示する」側）へと変容する、現代のアジアにおける博物館の潮流を明らかにし、アジア独自の博物館学・博物館研究のモデルをつくりあげる。

本事業の最終目標は、今までの欧米主流の博物館学・博物館研究とは異なる、アジアの文化的・社会的背景に即した独自の博物館学・博物館研究が創出されることであり、そのうえで、タイ、ミャンマー、モンゴルにおいて自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成の研究基盤が形成されることである。

6. 平成25年度研究交流目標

第2年度にあたる平成25年度は、日本とミャンマーにおける博物館・博物館学の比較研究と研究交流を目的に、ミャンマーで共同研究会とセミナーを開催する。

共同研究会とセミナーでは、日本とミャンマー両国の博物館・博物館学の専門家や教育研究者が発表を行い、従来の〈日本＝研修実施側〉、〈ミャンマー＝研修を受ける側〉という図式を超え、互いに研究成果や実践事例を共有しあう新たな研究協力体制を構築する。さらには、ミャンマー国内の博物館・博物館学の専門家や教育研究者とともに、ミャンマー国内における博物館ネットワークを強化する。

公開セミナーは、本事業に関わる研究者にとどまらず、ミャンマー全国の博物館や大学関連部局の若手人材を対象とする。博物館における教育と社会連携、そのための人材育成をテーマとすることで、博物館の社会的意義という最も根源的な問題について、本事業に関連する研究者、そして次世代の研究者が学術的観点から議論する契機としたい。

共同研究会とセミナーには、タイとモンゴルのコーディネーターも参加し討論に加わることで情報と知見の共有をはかる。これにより、本事業終了後、参画した研究者が共同で、アジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤を強固にする。

これらの活動と並行して、最終年度にタイで開催予定の共同研究会とセミナー、ならびに日本で開催予定のタイ、モンゴル、ミャンマー、そして諸外国の博物館・博物館学の専門家による国際シンポジウムの準備を進める。

7. 平成25年度研究交流成果

（交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。）

7-1 研究協力体制の構築状況

平成25年度は、日本とミャンマーにおける博物館・博物館学の比較研究と研究交流を目的に、ミャンマーで共同研究会とセミナーを開催した。

共同研究会とセミナーでは、日本とミャンマー両国の博物館・博物館学の専門家や教育研究者が発表を行い、従来の〈日本＝研修実施側〉、〈ミャンマー＝研修を受ける側〉という図式を超え、互いに研究成果や実践事例を共有しあう新たな研究協力体制を構築することができた。さらには、ミャンマー国内の博物館・博物館学の専門家や教育研究者と

もに、ミャンマー国内における博物館ネットワークを強化した。共同研究会と公開セミナーを通じて、日本 12 名（1 名は他経費）、タイ 1 名、モンゴル 1 名（日本に滞在中）、そしてミャンマーから述べ 200 名を超す参加者があり、活発な質疑応答、情報共有、意見交換をおこなうことができた。

7-2 学術面の成果

共同研究会と公開セミナーには、タイとモンゴルのコーディネーターも参加し討論に加わることで情報と知見の共有をはかった。これにより、本事業終了後、参画した研究者が共同で、アジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤がさらに強固になったと考える。なお、ミャンマーでの共同研究会と公開セミナーの成果は、発表時の使用言語である英語で刊行準備中である。本書はアジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための基盤をさらにかためる一助となるだけでなく、これまで情報の少なかったミャンマーの博物館事情が分かる書として、博物館活動・研究の参考書として活用できると期待できる。

7-3 若手研究者育成

公開セミナーは、本事業に関わる研究者にとどまらず、ミャンマー全国の博物館や大学関連部局の若手人材を対象として開催した。ヤンゴンでは、博物館学を学ぶ学生も含めた、多くの若手の研究者の参加があった。博物館における教育と社会連携、そのための人材育成がテーマとなっており、博物館の社会的意義という最も根源的な問題について、本事業に関連する研究者、そして次世代の研究者が学術的観点から議論する契機となった。

7-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

今回ミャンマーで開催した共同研究会と公開セミナーが契機となり、日本とミャンマー間のこれまでの研究交流の絆が一層強まった。また今後、ミャンマーで博物館・博物館学に係わる研究を進め、また若手人材育成をしていくうえで、日本側が協力していくことが再確認された。本プロジェクトの日本側拠点機関である国立民族学博物館は、国際協力機構（JICA）と協力のもと、滋賀県立琵琶湖博物館とともに課題別研修博物館学コースを企画・運営しており、平成 26 年度にはミャンマーから 2 名の研修員が参加する。

7-5 今後の課題・問題点

タイ、モンゴル、ミャンマーは、それぞれ博物館・博物館学がおかれている歴史的・社会的・文化的背景が異なる。初年度のモンゴル、平成 25 年度のミャンマーでの経験をふまえつつ、またそれぞれの国の状況を鑑みながら、最終年度にはタイでの共同研究会・セミナーを開催する。最終的には、アジアから世界へ、博物館学・博物館に関する研究成果・活動事例を発信し、欧米が主軸になりがちな博物館学・博物館研究に新たな切り口をひらくことを課題としている。本事業が終了後には、それぞれの国において自立的かつ持続的な博物館活動ならびに人材育成が構築されるよう、その基盤形成に協力していく。

7-6 本研究交流事業により発表された論文

平成25年度論文総数 0本

相手国参加研究者との共著 0本

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

8. 平成25年度研究交流実績状況

8-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	平成25年度	研究終了年度	平成25年度
研究課題名	(和文) 日本とミャンマーにおける博物館・博物館学の比較研究				
	(英文) Comparative studies in museums and museology: Japan and Myanmar				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 園田直子・国立民族学博物館・教授				
	(英文) Naoko SONODA・National Museum of Ethnology・Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) NU Mra Zan・Myanmar National Museum, Ministry of Culture・Expertise				
参加者数	日本側参加者数		12名		
	(ミャンマー)側参加者数		16名		
	(タイ)側参加者数		1名		
	(モンゴル)側参加者数		1名		
25年度の研究 交流活動	<p>平成25年度は、日本とミャンマーにおける博物館・博物館学の比較研究と研究交流を目的に、ミャンマーで国際共同研究会を開催した。</p> <p>ミャンマーでの国際共同研究会は、バガンとヤンゴンでの共同研究会と、ヤンゴンでの公開セミナーに分けられる。共同研究会は、博物館・博物館学の専門家や学生を対象に、博物館学の主要な構成要素である「展示」「保存とドキュメンテーション」をテーマに、日本とミャンマー両国の研究者や専門家が研究成果や博物館活動の事例報告を発表し、ディスカッションを行った。北部の中心都市であるバガン、南部の中心都市であるヤンゴン、この両都市で開催したのは、より多くのミャンマーの博物館関係者が参加できるよう考慮した結果である。各都市では、テーマごとに、日本、ミャンマー、モンゴル、タイ、それぞれの国の博物館事情や文化的・社会的背景をもとに全員でディスカッションを行い、情報と知見の共有をはかった。</p> <p>また、共同研究会の一環として、ミャンマー国内の博物館・文化施設</p>				

	<p>の視察、人材育成の現地調査を行い、研究者ネットワークの構築と共通の基盤形成をはかった。</p>
<p>25年度の研究 交流活動から得 られた成果</p>	<p>ミャンマーでの共同研究会開催により、日本とミャンマー間の博物館学・博物館に関わる研究交流が深化され、従来の<日本＝研修実施側>、<ミャンマー＝研修を受ける側>という図式を超え、互いに研究成果や実践事例を共有しあう、新たな研究協力体制を構築できたと考える。</p> <p>共同研究会にタイとモンゴルのコーディネーターが参画することで、情報と知見の共有がはかれるとともに、4か国間のネットワークの基礎がより強固になった。これにより、初年度のモンゴルでの共同研究会、最終年度タイで開催予定の共同研究会までを有機的に連携させることができる。</p> <p>また、最終年度に日本で開催予定の国際シンポジウムにおいて、参画した研究者が共同で、アジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤ができた。</p>

8-2 セミナー

—実施したセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 公開セミナー 「博物館の社会的役割と人材育成」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Social Role of the Museum and Human Resource Development”
開催期間	平成 25 年 9 月 27 日 ~ 平成 26 年 9 月 27 日 (1 日間)
開催地 (国名、都市名、 会場名)	(和文) ミャンマー、ヤンゴン、ヤンゴン国立博物館
	(英文) Myanmar, Yangon, National Museum Yangon
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 園田直子・国立民族学博物館・教授
	(英文) Naoko SONODA・National Museum of Ethnology・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) NU Mra Zan・Myanmar National Museum, Ministry of Culture・Expertise

参加者数

日本 〈人／人日〉	A.	12/ 12
	B.	
タイ 〈人／人日〉	A.	1/ 1
	B.	
ミャンマー 〈人／人日〉	A.	16/ 16
	B.	60
モンゴル 〈人／人日〉	A.	1/ 1
	B.	
合計 〈人／人日〉	A.	30/ 30
	B.	60

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本セミナーは、本事業に関わる研究者のみならず、ミャンマー全国の博物館と大学の関連部局の若手人材を対象とする公開セミナーであり、次世代育成という目標を併せ持つ。</p> <p>現在、ミャンマーで中心となって活躍している博物館・博物館学の専門家や研究者とともに、博物館の社会的役割というもっとも根源的な問題について学術的観点から議論することで、次世代をになう若手の研究者に新たな知見と視点を提供する。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>本公開セミナーにより、博物館の社会的意義、そしてそのための人材育成の重要性が、本事業に関わる研究者間のみならず、次世代研究者にも広く普及、共有された。共同研究会と公開セミナー全体を通じて、日本 12 名、タイ 1 名、モンゴル 1 名、そしてミャンマーからは述べ 200 名を超す参加者があり、活発な質疑応答、情報共有、意見交換をおこなうことができた。</p> <p>博物館・博物館学に関わる人材育成の国際的事例を共有することは、明日のミャンマーの次世代育成、スタッフ養成を考えるうえでの大きなヒントとなる。本公開セミナーは、ミャンマーにおいて、経済発展のうねりのなかで見過ごされがちな文化的側面、博物館や文化遺産の保護の重要性を再確認する契機となると期待される。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>ミャンマー文化省国立博物館の NU Mra Zan、日本側は国立民族学博物館の田村克己（ミャンマー研究）、園田直子（本事業コーディネーター）が協力して、企画運営する。</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容</p> <p>通訳謝金</p> <p>会場費・備品・消耗品</p> <p>消費税</p> <p>合計</p>	<p>金額</p> <p>159,136 円</p> <p>274,023 円</p> <p>7,956 円</p> <p>441,115 円</p>
	<p>(ミャンマー) 側</p>	<p>内容</p> <p>会場提供</p>	
	<p>() 側</p>	<p>内容</p>	

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

※実施の時期、概要、成果等をご記入ください。所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣期間	用務・目的等
滋賀県立琵琶湖博物館・専門学芸員・楠岡泰	日本・大阪・国立民族学博物館	2013年6月	ミャンマーでの共同研究会・セミナーに関する打ち合わせ
愛知県立芸術大学・客員教授・森田恒之	日本・大阪・国立民族学博物館	2013年6月	ミャンマーでの共同研究会・セミナーに関する打ち合わせ
国立民族学博物館・教授・園田直子	タイ・バンコック・ガンチャナピセーク国立博物館	2014年3月	タイでの共同研究会・セミナー実施計画等の協議
国立民族学博物館・教授・平井京之介	タイ・バンコック・ガンチャナピセーク国立博物館	2014年3月	タイでの共同研究会・セミナー実施計画等の協議

9. 平成25年度研究交流実績総人数・人日数

9-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本	タイ	ミャンマー	モンゴル	合計
日本	1		()	()	()	0/0 (0/0)
	2		()	12/108 (1/8)	()	12/108 (1/8)
	3		()	()	()	0/0 (0/0)
	4		2/10 (0/0)	()	()	2/10 (0/0)
	計		2/10 (0/0)	12/108 (1/8)	0/0 (0/0)	14/118 (1/8)
タイ	1	()		()	()	0/0 (0/0)
	2	()		1/8 ()	()	1/8 (0/0)
	3	()		()	()	0/0 (0/0)
	4	()		()	()	0/0 (0/0)
	計	0/0 (0/0)		1/8 (0/0)	0/0 (0/0)	1/8 (0/0)
ミャンマー	1	()	()		()	0/0 (0/0)
	2	()	()		()	0/0 (0/0)
	3	()	()		()	0/0 (0/0)
	4	()	()		()	0/0 (0/0)
	計	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
モンゴル	1	()	()	()		0/0 (0/0)
	2	()	()	()		0/0 (0/0)
	3	()	()	()		0/0 (0/0)
	4	()	()	()		0/0 (0/0)
	計	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)
合計	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	13/116 (1/8)	0/0 (0/0)	13/116 (1/8)
	3	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	4	0/0 (0/0)	2/10 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/10 (0/0)
	計	0/0 (0/0)	2/10 (0/0)	13/116 (1/8)	0/0 (0/0)	15/126 (1/8)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。(合計欄は()をのぞいた人数・人日数としてください。)

9-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計
2/2 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/2 (0/0)

10. 平成25年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	9,160	
	外国旅費	4,581,074	
	謝金	159,136	
	備品・消耗品 購入費	108,500	
	その他の経費	195,813	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	246,317	
	計	5,300,000	
業務委託手数料		530,000	
合 計		5,830,000	